



## 東日本大震災で思う

副理事長 法政大学法学部教授 宮崎 伸光

そのとき、私の娘は、友人と大型商業施設で買い物に興じていました。3月11日の14時46分、大きな揺れは突然やってきました。店内が騒然となるなか、偶然傍にいた小学生の2～3人を連れて大勢の人と共に店舗の外にある駐車場に彼女は避難しました。そこが石油コンビナートの爆燃火災現場に程近いことなど、知るよしもありません。ただ、店内アナウンスが途切れることなく駐車場にも響きわたり、人々はパニックには陥りませんでした。そこが避難所として指定されているのか、しばらくするとサッカースタジアムに誘導されました。しかし、建物自体の安全が見込めないということで入場はできませんでした。スタジアムの脇は意外に狭く、結局、もといた商業施設の大型駐車場に戻されました。商業施設の店員はよく訓練を積んでいたらしく、みなテキパキと動きます。避難民となった人々はそれに素直に従っていました。不安はなかったといえ、嘘になりましょう。しかし、寒さを感じ始めたころ、売り物のフード付きパーカーが配られ、身も心も温かくなったということです。彼女は、値札をはずそうとはしませんでした。それは、後々お礼とともに代金を返しに行きたいと思ったからです。

東日本大震災は、地盤の揺れや崩れなどによる被害、津波による被害、地面の液状化による被害、そして原発の損壊による風評も含めた放射能汚染被害の主に4種類の惨禍からなります。その全てが、千葉県にも及びました。私は、県内各所の被災現場を自分の目で見て、声を失いました。まさに未曾有の大規

模同時多発災害で、2ヶ月を過ぎた時点においても、被害の全貌すら明らかになりません。とはいえ、将来に向けた話は今からも必要です。悲惨な話から教訓を得ることも否定はしませんが、100人いれば100種類の体験があります。お互いに、ちょっと良い話を披露しあってみることに、案外将来に役立つヒントが隠されているような気がします。

日本の被災地で略奪が起きないことは諸外国の賞賛を得ています。自身が被災者でもある自治体の職員が避難所等で献身的に働くことについても同様です。ちょっと良い話は、きっとたくさんあるでしょう。

ところで、激しく被災した自治体のなかには、その実態をふまえ、県議選挙の延期を申し出たところがありました。しかし、結局は、その意思を貫いた浦安市と、折れて「とりあえず実務をこなした」（職員談）香取市に分かれました。また、選挙の実施を強く要請した県の関係者にも、その姿勢には後味の悪い思いをしている人が少なくないようです。「選挙どころでない」と叫ばれた言葉を重く深く受け止め考究することをはじめとして、この大震災には、自治体レベルの政治や行政に係る新たな研究課題を幾つも見いだすことができると思われます。

本号は、予定されていた企画を急遽変更し、東日本大震災に関する内容を特集することに致しました。関係者のご協力に深く感謝するとともに、読者のみなさまには、時間のないなかでまとめられた事情にご理解を賜りたいと存じます。